

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 14 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720137

研究課題名(和文)文学と理論 - 「新批評」再考

研究課題名(英文)Literature and Theory - Reconsidering "New Criticism"

研究代表者

三原 芳秋 (Mihara, Yoshiaki)

同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号：10323560

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「文学と理論」すなわち「『文学的なるもの』を理論化する」という知的営為/意志の所在を歴史的に探究することを目的とし、その主たる研究対象として英語圏における「新批評」を焦点化することでスタートした。一次資料の調査や国内外の研究者との対話を通して、従来の文学史的理解には収まらない「新批評」の潜在力を引き出そうとするうちに、当初の歴史的アプローチから離れ、より原理的な考察へと舵をきることとなった。また、その過程で他分野の若手研究者たちとのネットワークが形成され、結果的に「文学理論の生態学的転回にむけた学際的共同研究」(科学研究費補助金・基盤(B))へと発展することとなった。

研究成果の概要(英文)：This research project initially aimed at historically determining the intellectual will "to theorize the literary" by way of focusing on the Anglo-American "New Criticism". Through archival works and discussion with various scholars, I tried to carve out certain potentialities of the New Critical approach to "the literary". In this process, however, my interest shifted from a mere historical approach to a more theoretical one, and, in the end, I have successfully formed a research group with like-minded young scholars of various disciplines and set out for a new research project: "Towards the ecological turn in literary studies".

研究分野：英文学・批評理論

キーワード：文学と理論 新批評 生態学的転回

1. 研究開始当初の背景

- (1) 「新批評」を「(米国)南部農本主義イデオロギー」の顕現以外のなにもでもない、とする思想史的解釈は、Eagleton (1983, 1996) にみられるように早くから定説となっており、その後の詳細な研究により有意義な微調整がなされてきた (Jancovich (1993)、越智 (2012) など) とはいえ、基本的な評価に変更はない。この思想史的見解に根本的な疑義をさしはさむつもりはなく、一般論として十分に有効なものと考え、前世紀後半に勃興した様々な〈理論〉が「新批評」のヘゲモニーを打ち倒そうとしていた半世紀前ならいざ知らず、すでにその存在自体が死に絶えて久しい今日、「新批評」裁断のためのこのクリシェを繰り返すことの必要性には疑問があった。
- (2) 無論、「乗り越えた」はずの「新批評」が、ポスト構造主義を掲げる諸実践に「傷痕」として残存することを自己批判的に検証する (Jameson (1974)、Lentricchia (1980) など) のにも当時としては極めて重要な意義があったわけだが、これらの先鋭化した〈理論〉すら (当初の政治的衝迫力を失ったかにみえる) 「文化研究」や (ポストコロニアル批評の根源的な異議申し立てを消費し、やりすごした) 「地域研究」などに薄まってしまった感が否めないことを思うと、はたして、「文学理論」としての自己批判的悪魔祓いを今日において再演することにどれほどの意味があるのか、これもまた疑問であった。
- (3) そのうえで、「文学理論」すなわち『『文学的なるもの』を理論化する』という知的営為／意志の所在を考えると、自律した知の実践として「文学理論」を提示した「新批評」の考察は避けて通ることができないと考えられた。
- (4) イデオロギー批評による「新批評」批判の有効性を承認しつつも、そうやって集合的に批判することによって個々の「新批評家」が有していた差異、さらには特異な潜勢力といったものが等閑視されるきらいがあることは、「文学と理論」を原理的・反省的に考察する立場から問題であると思われた。
- (5) くわえて、広義の「日本における英文学研究」を (とくに帝国日本／植民地朝鮮を射程に入れて) 考察する際に、「新批評」の影響は甚大であるにもかかわらず、そのことの歴史的意義が十分に考察されているとは思えなかった。

〈参考文献〉

- Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. 2<sup>nd</sup> ed. Oxford: Blackwell, 1996. Print.
- Jameson, Fredric. *The Prison-House of Language*. Paperback ed. Princeton: Princeton UP, 1974. Print.
- Jancovich, Mark. *The Cultural Politics of the New Criticism*. Cambridge: Cambridge UP, 1993. Print.
- Lentricchia, Frank. *After the New Criticism*. Chicago: U of Chicago P, 1980. Print.
- 越智, 博美. 『モダニズムの南部的瞬間』 研究社, 2012. Print.

2. 研究の目的

- (1) 「新批評」= 「すでに有効性を失った過去のイデオロギー的運動」という文学史的理解をいったん括弧に入れたうえで、「新批評」が提出した「文学と理論」の問題系の本質を正確に見極め、そこに孕まれていた潜勢力の強度を測定する。
- (2) 「新批評家」としてひとくくりにされる文学理論家たちのあいだにある質的差異を見定め、その中から現代的意義を有すると認められる作家・作品を救い出し再評価する。
- (3) 専門分野にこだわらず、同様の関心・発想を持つ若手研究者と積極的に対話し、共同研究の可能性を模索する。

3. 研究の方法

- (1) まずは膨大な歴史的文献・二次資料の読解・分析作業を通じて、批評史的文脈の整理を行う。その作業によって、膨大な「新批評」の成果の中から、現代的意義の認められるものを選び出す。
- (2) ターゲットとなる「新批評家」について、アーカイブ調査によって一次文献の発掘・分析を試みる。
- (3) 関心・発想を共有する研究者たちと継続的な対話を行い、将来の共同研究を見据えたネットワーク構築を試みる。
- (4) 帝国日本／植民地朝鮮の思想史に関する代表者がこれまでに行ってきた研究に接続するかたちで、「日本における英文学研究」に「新批評」がもった思想的意味を考察する。

#### 4. 研究成果

- (1) 北米（プリンストン大学図書館の R. P. Blackmur Papers、ハーバード大学ホートン図書館の T. S. Eliot Collection など）や英国（ケンブリッジ大学キングズ・コレッジ図書館の Hayward Bequest など）のアーカイブ調査により、未公開の一次資料の収集・分析を行った。
- (2) 国内外における招待講演・口頭発表・論文発表（開催地：日本・韓国・ベルギー／使用言語：日本語・韓国語・英語）などを通じて、広く研究成果を公表した。
- (3) 「新批評」研究を進めるうちに、当初の歴史的アプローチから離れ、より原理的な考察へと舵をきることとなり、「文学理論の生態学的転回」という当初まったく予期していなかった着想を得るに至った。
- (4) 「エコゾフィー研究会」に参加し、問題意識を共有する他分野の若手研究者たちとのネットワークが形成され、さらにシンポジウムの企画などを通じて将来の共同研究の基盤ができた。
- (5) この新しい着想（3）・研究者ネットワーク形成（4）は、科学研究費補助金・基盤（B）への申請（「文学理論の生態学的転回にむけた学際的共同研究」）へとつながり、平成27～29年度の研究プロジェクトとして採択されるに至った。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

- ① 三原 芳秋, 【書評】 Richard Calichman & John Namjun Kim (eds.), *The Politics of Culture: Around the Work of Naoki Sakai*, 『日本研究』, 査読無, 51号 (2015年), 208-211頁。
- ② 三原 芳秋, 「〈翻訳〉の耐えられない不純さ」, 『日文化研』, 査読無, 53号 (2014年), 3-10頁。
- ③ 三原 芳秋, 「‘國民文學’의 問題」(韓国語・林慶花訳), 『現代文學의 研究』(韓国文學研究學會), 査読有, 47輯 (2012年), 189-222頁。
- ④ 三原 芳秋, 「‘普遍主義’와 ‘普遍性’의 사이: 스코틀랜드 啓蒙 과 國民

文學」(韓国語・張世眞訳), 『韓國學研究』(仁荷大學校 韓國學研究所), 査読有, 27輯 (2012年), 77-102頁。

〔学会発表〕（計 7 件）

- ① 三原 芳秋, 「文学理論における生態学的転回とはなにか? (プロレゴメナ)」, エコゾフィー研究会, 2014年12月14日, 同志社大学 (京都市上京区)
- ② 三原 芳秋, 「第一次世界大戦の総合的研究」, 京都大学人文科学研究所・共同研究「第一次世界大戦の総合的研究」班, 2014年10月25日, 京都大学 (京都市左京区)
- ③ 三原 芳秋, “Prof. Naoki Sakai’s Place in Modern Japanese Critical Theory”, Hong Kong University Faculty and Graduate Workshop: “Bordering”, 2014年10月13日, 香港大学 (香港)
- ④ 三原 芳秋, “Ch’oe Chaesŏ’s Invention of a “Japanese” Literature, or How English Literature Helped a Colonial Korean Intellectual Collaborate with the Japanese Empire”, East Asian Culture in Perspective, 2014年9月5日, ゲント大学 (ベルギー)
- ⑤ 三原 芳秋, 「de Man de-manned — 生態学的視点からド・マン再読を試みる、ならば」(企画パネル「ポール・ド・マン没後30年 — 記憶、機械、翻訳」), 表象文化論学会, 2013年11月9日, 東京大学駒場キャンパス (東京都目黒区)
- ⑥ 三原 芳秋, 「主催者による主旨・経緯説明」(シンポジウム「人文学の生態学的転回 (エコロジカル・ターン) のために」), 日文研共同研究「21世紀10年代日本文化の軌道修正: 過去の検証と将来への提言」, 2013年8月31日, 国際日本文化研究センター (京都市西京区)
- ⑦ 三原 芳秋, 「Person のカテゴリー — 文学理論の生態学的転回にむけて」(シンポジウム「人文学の生態学的転回 (エコロジカル・ターン) のために」), 日文研共同研究「21世紀10年代日本文化の軌道修正: 過去の検証と将来への提言」, 2013年8月31日, 国際日本文化研究センター (京都市西京区)

〔図書〕（計 1 件）

三原 芳秋, Cornell University Ph.D. dissertation, *Reading T. S. Eliot Reading Spinoza*, 2013年, 370頁。

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三原 芳秋 ( MIHARA, Yoshiaki )  
同志社大学・グローバル地域文化学部・准  
教授  
研究者番号：10323560

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：